

パプアニューギニアで  
 2年間の漁業普及活動

岡崎 進さん (双海町高岸)



「協力隊に参加したのは、大学の先輩の体験を聞いて、自分にも何かできることがあるんじゃないかと思ったからです。」こう話す岡崎進さんは、平成15年12月から青年海外協力隊員として、パプアニューギニアで漁業普及活動を行い、昨年12月、2年間の活動を終えて帰国しました。派遣が決定した当時は、大学4年生。就職活動も行っていましたが、自分の進路を決めきれずにいました。そんな中で受けた協力隊の試験に合格し、国際協力機構(JICA)から通知された派遣先が、パプアで現地前任者もないし、大丈夫か



▲1泊2日で行った無人島での漁業研修時の1枚。(左から2番目が本人。) 右端の男性が持つリールは岡崎さんの手づくり。

など不安もありましたね。」  
 配属先は、州都であるキンバ市の漁業資源課。漁業普及といっても岡崎さんに現地の情報はなく、何をしたらいいかわからず、最初の半年は長く感じたそうです。「始めは皆に『教えよう』という姿勢で接していましたが、でも途中からやめたんです。自分も何も知らないし、あくまでも主役は彼らですから。それと『先生』と呼ばれていましたが、『オカ』と呼んでくれと言いました。『先生』では壁があるような気がしたので。」  
 村人と生活を共にするにつれて、岡崎さんは、彼らの食事の中に魚介類が少ないことに気づきました。そ

ここで、村人の食糧事情を良くしようという目標をたてました。「彼らの漁法は原始的で非効率的な部分がありました。だから、食生活を安定させるため、より効率的に魚が釣れる針の使い方、えさのつけ方を教えることから活動を始めました。」  
 獲った魚を買い取ってくれる企業探しに奔走したことも。一方で、資金不足や、説明が通じない苦労もありました。「100教えて10とか5とか実行してくれたいほう。でも例えば、針の縛り方はこっちの方が効率があがるというようなことがあっても、彼らが嫌だと言ったらそれ以上は勧めません。彼らは今までもそれでやってきているので。ただ、多少楽になればいいなと気長にこつこつ取り組みました。新しく作ったしかけに魚がいつばいついてきたときは、彼らが喜んでくれて、自分もうれしかったです。自分がいなくなっても、自分から『あつ、あのととき『オカ』が言っていたから。』と実行してくれたいです。」  
 『郷に入れば郷に従え』の精神で、地元の人々と同じ目標で考え、活動する日々。「終わってみると、2年間はあつという間でした。日本とは違う文化に触れて、特に食事って何だ?と興味を持つようになりました。」食に関する仕事に就きたい。活動を終えた今、岡崎さんは、新たな目標に向かってがんばっています。